

名 譽 員 推 薦

(写真：敬称略)



内 海 善 雄

推 薦 の 辞

内海善雄君は、1965年に東京大学法学部を卒業され、(株)東芝に勤務された後、1966年に郵政省に入省されました。その後、同省総務審議官、郵政局長、審議官等を歴任された後、1999年には国際電気通信連合（ITU）事務総局長に就任されました。郵政省勤務中には、米国シカゴ大学大学院にて1972年に政治学修士学位を取得されました。現在は、(財)海外通信・放送コンサルティング協力の理事長を務められています。

同君は、情報通信技術の普及こそが人類から貧困と紛争をなくする最も有効な手段であるとの信念のもと、情報通信技術が有効に活用されるよう国内のみならず国際的な環境整備に努めてこられました。

郵政省入省後1980年代には、当時先導者がいなかった通信・放送行政分野における自由化・競争施策を推進し、特に第二種電気通信事業制度を創設するなど、我が国が欧州諸国に比較して10年早く通信自由化を実現することに多大な貢献をされました。同時に、情報通信分野の発展促進のための税制、財政投融资制度、補助金など電気通信育成諸制度を創設し、現在の情報通信政策の基礎を築かれました。これらの結果、我が国は現在、世界に冠たる多様で安価な情報通信サービスを実現するに至っています。また、関税及び貿易に関する一般協定（GATT）における基本電気通信自由化多国間交渉においても指導的な役割を果たされ、各国の通信自由化に関する合意に至ることができました。

その後、1994年に開催された京都国際電気通信連合（ITU）全権委員会議において議長を務められ、その卓越した議長采配が多くの国の賞賛を得て、1998年ミネ

アポリス全権委員会議でITU事務総局長に選出されました。同君は事務総局長就任当初から第3世代携帯電話の規格統一にいち早く取り組み、その実現に尽力されるとともに、最近では次世代ネットワーク（NGN）の規格策定の推進など、電気通信分野における標準化の推進に力を注いでこられました。

また、同君がITU事務総局長として世界に提案し実現した国連世界情報社会サミットは特筆に値するものです。同君は2003年ジュネーブ、2005年チュニスと2度のサミットを主催し、2015年を目標とした世界的なデジタルデバйд解消に向けて、国連サミットとして初めて実施計画まで踏み込んだ合意を得るなど多くの成果を得ることができました。同サミットは多くの非政府機関や学術機関、メディア、その他の市民団体の全般的な参画のもとで開催された革新的なものでした。同君のこれらの貢献によって、ITUは国連の情報通信に関する技術専門機関というだけでなく、国際社会発展のための政策機関として位置付けられるようになり、その重要性は飛躍的に増大しました。

同君は、銀星十字勲章（ドミニカ共和国）、ジュネーブ名誉ブルジョワジー、早稲田大学名誉博士号、前島賞、情報通信月間総務大臣賞等を受賞されているほか、「勝つための国際交渉術」（日刊工業新聞社）、「国連という錯覚」（日本経済新聞出版社）、「「お辞儀」と「すり足」はなぜ笑われる」（同）等を著されています。

以上のように、同君は、情報通信分野の国際標準推進にとどまらず、多国間の国際的連携・協調にも多大な貢献をされるなど、情報通信社会の世界的発展に寄与された功績は極めて顕著であり、ここに同君を本会名誉員として推薦致します。



小林 功 郎

推 薦 の 辞

小林功郎君は、昭和45年3月に東京工業大学大学院理工学研究科電子工学専攻修士課程を修了後、直ちに日本電気株式会社に入社されました。その後、同社光エレクトロニクス研究所長、基礎研究所長、支配人を歴任され、平成14年3月同社を退職されました。平成14年4月に東京工業大学精密工学研究所教授に就任、平成20年4月同研究所長に就任され、平成22年3月定年退職されています。この間、昭和52年6月には東京工業大学から工学博士の学位を授与されています。

日本電気株式会社入社後は、中央研究所、光ケーブル通信開発本部などで、光通信用の半導体レーザの研究開発・実用化に従事されました。昭和45年に同社が日本初の半導体レーザの室温連続動作に成功したときの研究チームの一員として参加したのを皮切りに、半導体レーザの高性能化へ向け、①発振横モードの不安定性が与える異常な特性の解明、②半導体レーザの直接変調特性を改善する外部光注入同期の実験的検証、③半導体レーザ動作特性への反射戻り光の影響の実験的解明、④1,300～1,550nm 長波長帯単一横モード半導体レーザ(DC-PBH LD)の開発・実用化、⑤長波長帯単一軸モード(動的単一モード)半導体レーザ(DFB-DC-PBH LD)の開発・実用化など、多彩な活躍をされました。

①の横モード不安定現象の研究からは、半導体レーザの安定な動作特性を実現するためには電流等で変化しない造りつけられた光導波路構造が必須であるという重要なガイドラインが導かれ、その後の半導体レーザ特性向上の基礎を築かれました。この基本概念に基づいて開発された④DC-PBH 半導体レーザは、50mW 基本横モード光出力、125℃までの直流発振、48%電気-光変換効率、100万時間以上の動作寿命など、1980年代前半当時の半導体レーザの最高性能記録をほとんど塗り替える高性能化を実現されるなど、大変優れたものです。この

半導体レーザは、日本電気株式会社の光通信装置に搭載され、陸上光通信システムはもとより、光海底ケーブルシステムの発展にも大きく貢献されました。更に、このDC-PBH 構造の活性層付近に周期構造を導入した⑤分布帰還形(DFB)の半導体レーザにより、直接変調時にも単一軸モードが保たれる光源が実現され、長距離・大容量光ファイバ通信システムの実現・普及に大きく貢献されました。

大学に移籍された後は、文部科学省の科学研究費特定領域研究“新世代光通信のイノベーション”の領域代表者としてプロジェクトを主導し大きな成果を上げられました。

同君は、OECC (Opto-Electronics Communication Conf.) や CLEO-PR (Pacific Rim Conf. on Laser and Electrooptics) などの光エレクトロニクス関連の国際会議の議長やプログラム委員長などを数多く務め、技術の発展、普及に貢献されました。また、論文発表に加えて、フォトニクス関連書籍執筆や国際会議での基調講演・招待講演など多数行い、当該分野の発展と普及、及び啓発に貢献されました。

本会においては、レーザ・量子エレクトロニクス研究専門委員会委員長、編集理事、企画・調査理事、総務理事、エレクトロニクスソサイエティ会長、ELEX 編集委員長などを務められ、本会の発展に貢献されています。これらの研究活動における成果と学会活動に対して、IEEE Fellow (平成8年1月)、本会フェロー(平成18年9月)及び応用物理学会フェロー(平成19年9月)の称号を受けておられます。また、本会功績賞、業績賞、論文賞、学術奨励賞、大河内記念技術賞、SSDM Award、大川出版賞など、数多くの賞を受けられています。

以上のように、同君の本会並びに光エレクトロニクス分野の発展に寄与された功績は極めて顕著であり、ここに同君を本会の名誉員として推薦致します。



仙石正和

推薦の辞

仙石正和君は、昭和42年新潟大学工学部電気工学科を卒業し、昭和47年北海道大学大学院工学研究科博士課程を修了され工学博士の学位を取得されました。昭和47年に北海道大学工学部助手、昭和53年に新潟大学助教授、平成元年に新潟大学教授となり、平成22年3月に定年を迎えられるまで研究、教育に御尽力されてきました。この間、平成9～13年に新潟大学留学生センター長、平成13～15年に新潟大学学長特別補佐、平成15～19年に新潟大学工学部長を務められています。また、平成20年に新潟大学理事・副学長に就任され、現在に至っておられます。大学において情報通信工学及び回路とシステム工学に関する研究に取り組まれ、数々の優れた成果を上げられ、また学生の指導に力を尽くされ、数多くの優秀な技術者・研究者を学界・産業界に送り出されました。

同君は、主にグラフ・ネットワーク理論とその情報通信・回路への応用に関する研究に取り組んでこられました。回路網、情報通信ネットワーク、移動通信ネットワーク等のネットワーク構造を有する様々なシステムの基本特性をグラフ・ネットワーク理論的アプローチにより明らかにすることにより、これらのシステムの諸問題に取り組んでこられました。近年ではアドホックネットワーク（マルチホップ無線ネットワーク）等の新しいネットワークシステムに関する研究も精力的に行い、世界の第一線で、先駆的貢献を行ってきています。これまでの研

究の中で、フローネットワークにおけるロケーション理論の構築、並びに移動通信ネットワークにおけるチャネル割当問題の研究等、従来にはない新しい問題の定式化、研究分野の開拓を行い、先駆的な研究を行ってきており、これらの研究は、本会論文賞（4回）、業績賞、功績賞、フェロー、IEEE ICNNSP'95最優秀論文賞、IEEEフェローを授与されることにより評価されています。

本会に対する貢献としては、回路とシステム研究専門委員会委員長（平成7～8年）、編集特別幹事（平成9～11年）、評議員（平成8～12年）、信越支部長（平成11～12年）、通信ソサイエティ副会長（平成12～14年）、基礎・境界ソサイエティ副会長（平成13～14年）、基礎・境界ソサイエティ次期会長（理事）（平成14～15年）、同会長（理事）（平成15～16年）、英文論文誌A編集委員長（平成17～19年）等を歴任し、多大なる貢献をされています。また、地方における学会活動の活性化にも多大な貢献があり、本会信越支部長、信越情報通信懇談会会長としての活動のほかに、平成18年に設立されたIEEE信越支部の初代支部長として支部立上げのために中心的な役割を果たされる等、多大な貢献をされています。また、国内だけではなく、外国誌のエディタを現在も幾つか務められており、国際的にも大いに本会の存在を高めるのに貢献されています。

以上のように、同君の本会及び電子情報通信工学の分野における功績は極めて顕著であり、ここに同君を本会の名誉員として推薦致します。





宮原 秀夫

推 薦 の 辞

宮原秀夫君は、昭和42年3月大阪大学工学部通信工学科を御卒業後、昭和47年3月に大阪大学大学院工学研究科通信工学専攻にて修士課程を修了され、大阪大学工学部助手、京都大学工学部助手、大阪大学基礎工学部助教授、大阪大学情報処理センター助教授を経て、昭和62年1月大阪大学大型計算機センター教授に昇任されました。この間、昭和48年1月大阪大学から工学博士の学位を取得しておられ、また、昭和58年6月から1年間はIBM トーマス・ワトソン研究所客員研究員として研究に取り組んでこられました。平成元年10月から大阪大学基礎工学部教授に御就任、大阪大学基礎工学部情報工学科第六講座（計算機組織学講座、現先進ネットワークアーキテクチャ講座）を担当され、電子情報通信分野で活躍する多くの研究者を輩出されました。平成9年4月から大阪大学大学院基礎工学研究科教授、平成14年4月から大阪大学大学院情報科学研究科教授を務められた後、平成15年8月大阪大学総長に就任され、平成19年8月に任期満了により退任された後、平成19年9月から独立行政法人情報通信研究機構理事長に就任され、現在に至っております。

同君は、コンピュータネットワークの基礎研究とその普及推進に従事してこられました。ARPANET プロジェクト発足当初より、いち早くコンピュータネットワークにおけるパケット交換技術の回線交換技術に対する優位性に着目され、その優位性を理論的に証明されるなど、コンピュータネットワークのモデル化と性能評価を学問領域として確立し、それを基礎理論としたネットワーク

設計手法の導入により、コンピュータネットワークの実用化に大きな道を開かれました。情報通信基盤としてのコンピュータネットワークのあり方を示すだけでなく、新しいコミュニケーション手段としてのコンピュータ通信の可能性にいち早く着目され、コンピュータネットワークを有効に活用する分散マルチメディアアプリケーションの研究、開発をあわせて推進されてこられました。ATMの研究においては、理論的にその有効性、適用範囲を明らかにするとともに、新しいATMスイッチアーキテクチャの標準化提案や大阪大学キャンパスLANへの導入など、その普及にも大きく寄与されました。局所的な性能改善をもたらす制御手法の提案に固執するのではなく、ネットワーク全体を統合的にとらえた研究活動により生み出されてきた一連の研究成果は、次世代ネットワークのあり方を示唆する極めて重要なものであり、同分野の研究活動に対して多大な影響を与えています。

本会においては、情報ネットワーク委員会委員、交換システム研究専門委員会委員長、通信研究グループ副委員長、通信研究グループ国際化アドホックグループ主査、編集理事などを歴任され、平成20～21年には会長として、学会の活性化と運営に御尽力されました。

これらの功績に対して、これまで本会から論文賞、業績賞、フェロー、功績賞等の各賞を、また、近畿電気通信管理局長表彰、通商産業大臣賞、総務大臣表彰、IEEE ライフフェロー等、数多くの賞を受賞されております。

以上のように、同君の本会及び関連団体等における電子情報通信分野の発展に寄与された功績は極めて顕著であり、ここに同君を本会の名誉員として推薦致します。

